

新潟県上越市大潟区の河童伝説についての 歴史地理学的研究

曾根 愛里華

(佐々木 高弘ゼミ)

目次

1. はじめに
2. 歴史地理学について
3. 上小船津浜の伝説（「のどけの薬」）
 - 3.1 「のどけの薬」の概要と問題提起
 - 3.2 「のどけの薬」における欠如要因
 - 3.3 海に棲む河童
 - 3.4 海から来る者
 - 3.5 上小船津浜と国府
 - 3.6 直江津と越後福島城
4. 鵜ノ池の伝説
 - 4.1 鵜ノ池の伝説の概要と問題提起
 - 4.2 梶村と河童
 - 4.3 大滝家と河童
 - 4.4 鵜ノ池の奪還と失敗
5. おわりに
6. 参考文献

1. はじめに

河童は今や町おこしなどのマスコットキャラクターにもなる私たちになじみ深い妖怪となっている。加えて沼湖や用水、堀、川淵に棲むという河童伝説は日本全国に語られ、河童に関する研究も多くの研究者が進めている。その中で河童は、人に何らかの悪事を働くが敗北し、最終的には人に帰順するという典型的な行動をする。中村禎里はそれを (a) 人にたいする河童の攻撃、(b) 人の反撃と河童の敗北、(c) 人への河童の帰順、というように3つに区分した⁽¹⁾。ここで、この典型からはずれた河童の伝説はあるのかというところに、筆者の関心の1つがある。それが本稿で考察する新潟県上越市大潟区で語られる上小船津浜の伝説（「のどけの薬」）である。河童が人にいたずらを仕掛け、腕や皿を割られるのを避けるため、

代わりに薬の作り方を伝授するという「河童の妙薬」譚である。なぜ上小船津浜の伝説は、中村の言う (a) 攻撃 (b) 敗北 (c) 帰順が成り立たないのかを考察していきたい。

新潟県上越市大潟区には、もう一つ河童伝説が存在する。それは、鵜ノ池の伝説である。こちらは上小船津浜の伝説よりもポピュラーで、毎年六月に開催される「大潟かっぱ祭」の元になる伝説である。鵜ノ池の伝説は河童が馬にいたずらを仕掛けるという「河童の馬曳き」譚に相当する。図1は新潟県上越市大潟区における上小船津浜と鵜ノ池の位置関係である。

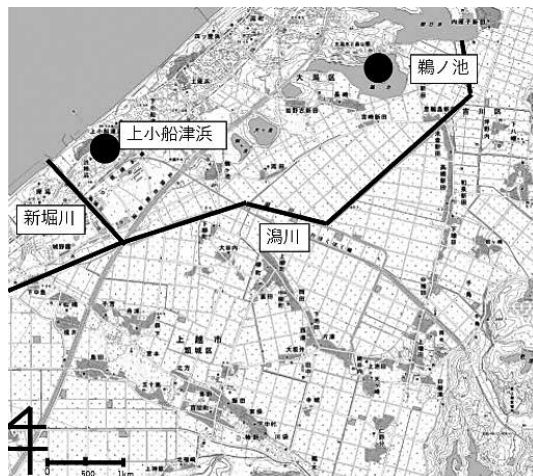


図1 上小船津浜と鵜ノ池
2万千分の1地形図「高田」より

図から約3kmしか離れていないことがわかる。なぜこれほど近い距離であるのにも関わらず、異なる河童伝承が生まれたのだろうか。また、両者の違いはどのようなことに起因するのかを本稿では考察していきたい。

2. 歴史地理学について

本稿では、人々の過去の地理的行動と、その結果としての地理的空間を研究する歴史地理学 (historical geography) の手法を参考にす。歴史地理学は、藤岡謙二郎によると、取り扱う時代から、文献のない有史以前を扱う①先史地理学、同一時代の文献ではなく、後の時代に作られた文献を扱う②原始地理学、有史以降を扱う③歴史地理学に区分される。また、扱う資料から①文献歴史地理学、②考古歴史地理学、③民俗歴史地理学の三つに分かれる。①の文献歴史地理学は、文字で遺された資料を扱うのに対し、②考古歴史地理学は考古資料、すなわち遺跡や出土した遺物を対象とする。③の民俗歴史地理学は、人びとによって語り継がれてきた過去を研究する⁽²⁾。本稿では、神代から江戸時代、現代を中心に考察していく。ゆえに、神話や考古資料、そして聞き取り調査などの資料を取り扱う。つまり、①文献歴史地理学、②考古歴史地理学、③民俗歴史地理学を総合して私たちの過去を研究していく。

さらにイギリスの歴史地理学者であるプリンス (Prince, H.C) は、歴史地理学の研究領域を過去の現実世界の復原である①現実世界 (Real World)、私たちの空間行動に影響を与えるイメージの研究である②想像世界 (Imaged World)、人類に通底する普遍的な空間行動の研究である③抽象世界 (Abstract World) の3領域に分けた⁽³⁾。本稿では、河童伝説の舞台となった上小船津浜と鶴ノ池がどのような過去を持っているのかについて考えるのが①現実世界 (Real World) の研究に当たる。②想像世界 (Imaged World) は、なぜ上小船津浜と鶴ノ池に河童を出現させたかという本稿の大きな問いを解く重要な手がかりとなる。③抽象世界 (Abstract World) の研究では、人びとはなぜ河童という妖怪を想起し、それが人びとの生活や行動にどう影響しているのかについて考えていく。

では、大潟区の2つの河童伝説の舞台である上小船津浜と鶴ノ池はどのような場所なのだろうか。前者は、海沿いにある村で、「古くは漁村として発達した村々であり、集落間の間隔がほぼ一定なのは、集落ごとの漁場を確保するため⁽⁴⁾」

とあるように、漁業を生業にしてきた。一方で後者は、上小船津浜よりも内陸に位置し、あたりは田園が広がっており、強いて言えば山沿いの地域に当たる。つまりこの地域では稲作を生業にしてきたことが分かる。これらの違いは河童の生成にどのように関係しているのだろうか。また、そのような土地で生成された河童たちが私たちに何を訴えようとしているのだろうか。

3. 上小船津浜の伝説 (「のどけの薬」)

3.1 「のどけの薬」の概要と問題提起

まずは、『新潟県伝説集成 (上越篇)』に記載された「のどけの薬」を紹介する。

昔、上小船津浜に上新保家という網元があった。ある日、漁に出て網を上げると、変わった動物がかかった。よく見ると、それは河童だった。人々は気味悪がって殺そうとしたが、網元はかわいそうだといって海へ放してやった。

その夜、河童は網元の夢枕に立ち、「さきほどは、ありがとうございます。お礼に、のどの薬『のどけ』の作り方を教えましょう」

といって、薬の製法をこまかに説明した。翌日、聞いた通りに薬を調合し、口内炎の人に飲ませてみたら効果てきめん、すぐに全快した。

それから、この「のどけの薬」は大評判になり、近所ばかりでなく遠く信州や越中からも買いに来た。このため、製造が間にあわぬほどの繁昌ぶりで、家人はうれしい悲鳴をあげた。

昭和のはじめごろ、一袋二十七銭で売り出していたというが、戦争が始まってから原料の草がなくなり、とうとう製造できなくなってしまったという⁽⁵⁾。

河童から妙薬を授かるという全国に存在する典型的な話型である。しかし『大潟町史』には同じ「のどけの薬」の伝説であるにもかかわらず、ある要素が追加されている。引用すると、

今から約100年くらい昔のことです。上小船津浜という村に、上新保という「あみもと」

の家がありました。

上新保さんと近所の人たちは、毎日のように漁に出掛け、網に引っかかってくる魚を見ては喜んでいました。そして、とれた魚の半分は上新保さんに、残りの半分は手伝いの近所の人たちに分けてやり、生活を成り立たせていました。

ある日のことです。いつものように上新保さんたちは、漁に出掛けていきました。そして、「今日も、いわしがいっぱいとれるといいなあ。」「おれ昨日、くじらをつかまえた夢を見たでね。……この舟の倍もでっかいやつでね。」と、まじめな顔で話し合っていました。ところがやがて不思議なことが起こったのでした。「せえの ヨイショ！せえの ヨイショ！」と、力を合わせて網を引きますが、いつもと違って大変重いのです。やっとの思いで網を引き上げてみますと、その中に1匹の「すじんこ」(別名カッパ)が引っかかっていました。気味の悪い「すじんこ」を見て、人々は「殺すか!」「いじめるか!」などと言っていました。さすがはあみもとさんです。すじんこを網からといて、海へ放してやりました。そして、その不思議な出来事から時間がたち、夜になりました。

仕事を終え、疲れきった体を布団にあずけ、あみもとさんはいつの間にか眠りに入りました。すると、夢の中に昼間のすじんこが姿を現しました。どうやら夢知らせのようです。「さっきはどうもありがとうございました。そのお礼に、のどけの薬(今の口内炎やのどけの薬)の作り方を教えましょう。お役に立てればと思います。まず、これとこれを混ぜて、ああやって、こうやって……これでできあがります。この薬で皆さんの、のどを治してやってください。」

と言って、夢の中から立ち去りました。

あみもとさんは、半信半疑で、その薬を作ってみました。出来上がった薬は、黄色みがかっただいたい色で、ややすっかい粉の薬となりました。そこで早速つけてみることにしました。薬はのどの奥につけないと効果がありません。そこであみもとさんはいろいろと工夫し

た末、細い竹の先を平らに切り、その先にのどけの薬を載せ、ふっと吹くと、見事にのどの奥までいくことがわかりました。

早速ためしにつけてみると、涙が出るほどしみて、よだれがだらだら出てきてしまうのです。“でてくるな”といっても出てくるのでした。しかし、その効果といたらすごいものでした。魔法にかかったように、みるみるうちに治ってしまうのです。

それからというものは、この「のどけの薬」は大変な評判になり、近隣ばかりでなく、遠く県外からも買い求めにやってきました。こうなると「のどけの薬」もだんだんと、大量に作らなければならなくなり、とうとう元になる薬がなくなってしまいました。

そこで、直江津の金谷薬屋へ行って6、7種類の元になる薬を買って来て、これを調合しました。作り方は、やげんを用いて、これをすりつぶして粉にし、これをちぎ(はかり)にかけて計り、一服ずつ盛り付け、更にこれを大きな薬にまとめて売るようにしました。戦争中の昭和17年ごろ、元になる薬が手に入らなくなり、とうとうこの「のどけの薬」を作ることをやめてしまいました⁽⁶⁾。

このような異話の採集は、民話を研究する者にとって重要である。なぜならば、伝説を研究者が記述することによって、それが代表的なものとして流布し、その他の異話を消し去ってしまう恐れがあり、その他の異話を見落とせば、代表的なものとして記録された一つの異話が、人々の思考のなかで占めている位置を見失うことになり、とりあげられた異話の理解さえ不十分なものになってしまうからである⁽⁷⁾。

ここから追加されている要素を抜き出すと、以下の2点になる

- ①直江津の金谷薬屋へ行って6、7種類の元になる薬を買ってくる点
- ②作り方が詳細な点(やげんを用いて、これをすりつぶして粉にし、これをちぎ(はかり)にかけて計り、一服ずつ盛り付け、更にこれを大きな薬にまとめて売る)

加えて、『大潟町史』には、この伝説を語った人物についても書かれており、その中でも土底浜の人が語っているという点にも注目したい。なぜなら、伝承者が変わればその土地をどう認識しているかが異なり、伝説を捉える視点も変わってくるからである。土底浜の位置は図2に示される通りである。

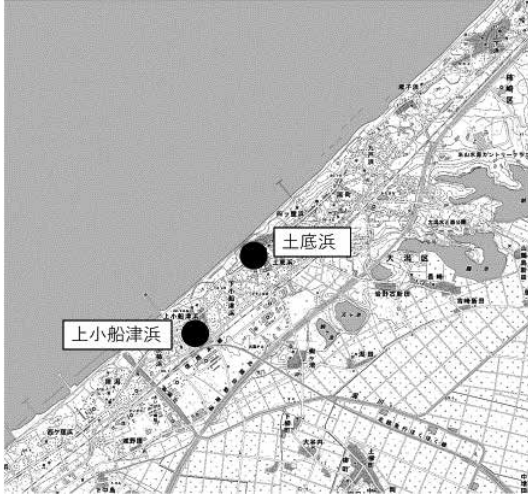


図2 上小船津浜と土底浜
2万5千分の1地形図「高田」より

さて、ここで問題視したいのは、なぜ上小船津浜の河童伝説を土底浜の人が語るのかということ

ある。なぜ土底浜の人は上小船津浜に河童を出没させたのか、と言い換えることができるが、この問題を探るには、「のどけの薬」で語られる河童像、そして上小船津浜という場所について言及していく必要がある。なぜならば、これによって土底浜の人が河童をどのように認識しているかを明らかにすることができると同時に、土底浜に住む人が上小船津浜をどう知覚しているかがわかるからである。

3.2 「のどけの薬」における欠如要因

1. はじめにでも述べたとおり、河童は人や馬に対していたずらをするという伝説が多く存在する。そのため、川や湖で水遊びをする際は、深いところへ行っはいけないなどという子どもへ警戒を促す文句にも使われたりする。ここで「いたずら」の定義が必要になる。いたずらとは、「①（悪戯）と書く）無益でわるいたわむれ。わるふざけ。わるさ。②性的にみだらな行い。③男女の私通。不義⁽⁸⁾」をいう。河童でいうところの、人の尻子玉を抜こうとしたり、馬の尻尾に掴まったりする行為をいう。では、この「のどけの薬」では河童からのいたずら、もしくは働きかけがあるだろうか。さらにいうと、河童に対して人びとはどのように対処したのだろうか。新潟県内にある「河童の妙薬」型の類話をまとめたのが表1である。

表1 新潟県内の「河童の妙薬」譚

出現場所	人物	いたずら内容	人間の行動	特定の場所	文献
海	上新保 あみもと		海に放してやる	上小船津浜 金谷薬屋	『大潟町史』
淵	屋号・上屋敷 の主人	馬小屋のおけの中に隠れる	捕まえる	信濃川と七川の合流 する辺り 中里村小原	『にいがたの怪談』
川	宮尾家 宮尾某 宮尾家の主人	悪さをする 馬の尻子玉を抜こうとする	片腕を切り落とされる 鎌で片腕を切り落とす	京ヶ瀬村猫山	『にいがたの怪談』 『伝説のふるさと』
便所	吉兵衛 (力持ち)	便所の下から腕を伸ばし 尻に手をかける	腕を引く	糸魚川市西海村羽生	『にいがたの怪談』 『新潟県伝説集成 〔上越篇〕』
川	嘉右門	銅い葉おけのなかに隠れる	捕まえて柱に縛り付ける	三島郡和島村の島崎川	『にいがたの怪談』
川	金助	馬の尻尾にぶら下がる	殺そうとする	三島郡三島町蓮花寺	『にいがたの怪談』
便所	鴻池屋という 薬屋の祖先	胆を抜き取ろうとする	腕をつかんで捕まえる	小木町下中町（現佐渡市）	『にいがたの怪談』
海	黒兵衛	馬の肝を取ろうとする	腕を持ち帰る	藤崎	『糸魚川・西頸城の 民話』第4集
圃	サワジロ	嫁のしんのこを取る	腕を抜く	青海	『糸魚川・西頸城の 民話』第5集

「のどけの薬」で河童は、漁に出た網元の網に引っかかっていた。それを網元である上新保という人物がかわいそうに思って海にそのまま放してやるのである。一方、新潟県内で語られる「河童の妙薬」の伝承では、馬の尻尾について尻子玉を抜こうとした河童の腕を切り落としたり、人の尻子玉を抜こうとする河童の腕を引き抜いたりと残虐なものが多い。それに比べると、「のどけの薬」では、いたずらとは呼べないほど程度が低く、それに対する人びとの反応も残虐とはいえない。本稿ではこれを一種の欠如要因とみなす。なぜ、「のどけの薬」には河童からのいたずらと人から河童に対する行動が欠如しているのだろうか。

千葉徳爾は河童側から人への働きかけがないということ、「河童に対する人の考えかたが、これを対等もしくはより高い霊とみなす段階にあっては、これを悪と考え、さらにそれをこらしめて過料をとろうというような観念は存在しないであろう⁽⁹⁾」と述べている。加えて千葉は「このような観念があらわれたのは、信仰の衰微であり、神の墮落である。人が水の霊よりも優位に立っているという自覚なくしては、この、霊を助けてその宝や霊力を我がものにしようという話は生まれない。」とした。つまり、この種の河童は人々にとってプラスな存在であったということがいえる。では、この地域において河童をプラス要素と捉える古い信仰の視点はどこにあるのだろうか。

3.3 海に棲む河童

まず注目したい点は、海から河童がやってくるという「のどけの薬」の河童像である。河童は川や沼湖に棲むというイメージが強いが、果たして、海に棲む河童はいるのだろうか。

平戸藩主の松浦静山の随筆『甲子夜話』では、海に棲む河童について記述される。それを以下に引用する。

〔九〕対州には河太郎あり。浪よけの石塘に集り群をなす。亀の石上に出て甲を曝が如し。その長け二尺余にして人に似たり。老少ありて白髪もあり。髪を被りあるも、又逆に天を衝くも種々ありとぞ。人を見れば皆海に没す。常に人につくこと狐の人につくと同じ。国人

の患をなすと云。又予若年の頃、東都にて捕へたと云図を見たり。左にしるす。



図3 中村幸彦・中野三敏校訂、下中邦彦発
『甲子夜話2』平凡社、1977年、285頁より

これは享保中、本所須那村の芦葦の中、沼田の間に子をそだてるしを、村夫見つけて追出し、その子を捕たるの図なり。太田澄元と云へる本草家の父岩長玄浩が鑑定せし所にて、水虎なりと云。又本所御材木倉取建のとき、芦藪を刈払しに狩出して獲たりと云。〔『余談』⁽¹⁰⁾]

また、飯倉義之は九州の河童の事例を取りあげ、「中国の黄河に棲む河童が海を渡って球磨川に渡来したという言い伝え⁽¹¹⁾」も紹介し、日本全国に河童が海からやってくるという型の伝承は存在すると思われる。「のどけの薬」で語られる河童もその1つであると考えられる。

3.4 海から来るもの

沢史生は河童を「海の彼方からやってきた海霊・海神と崇められた倭人」であるとし、また鉄を扱うことができたことから、河童は実在の人間でありつつ、王権の支配下では異界異形とされた者たちであるとした⁽¹²⁾。また、小松和彦は妖怪を実在の人間として見ることで民話を解釈している。特に小松は、河童人形起源説話を取りあげ、河童のイメージの主要な構成要素が「川の民」に深く結びついたイメージをもっていると指摘する⁽¹³⁾。ここから、上小船浜津の河童伝説に登場する河童

も実在した人物であると考えられる。さらに両説は河童をあとからこの地に入り、もともとそこに住んでいた人を賤視して「河童」とみているということが言え、河童をマイナスに捉えているものが多い。では、この地域の人々にとって「海からくるもの」とは何だったのであろうか。またそれをこの地域の人々はマイナスと捉えていたのだろうか。

まず、挙げることができるのは、伝説でも描かれたちぎ（はかり）をもたらしした人である。『大潟町史』にみる異話②でも取りあげたが、丁寧に薬の作り方を記述しているのは何らかの意味があると考えられる。ここで、視点を金谷薬屋のある直江津に動かしてみると、直江津には古くから越後国式内社として信仰を集める居多神社がある。そこで神主(社務・宮司)を代々務めてきた花ヶ前氏が、日本の「秤」の元祖なのである。「花ヶ前家は崇神天皇の第一皇子豊城入彦命の後裔。その末裔である久比が第32代崇峻天皇の御代(588～92)、呉の国より『波賀里』(秤)を持って帰国した⁽¹⁴⁾」とあるように、呉の国から海を渡ってきたものという解釈ができ、さらには河童が薬またはその技術を伝授する者として捉えることができる。これは、伝説で語られる河童像と一致している。

しかし、これだけでは河童がこの伝説を語る人々にとってどのような存在であるかが不透明である。つまり、この地に来て大潟区の人びとにとってプラスの行動をした者について考える必要がある。

大潟区には「米大舟」という民謡が語り継がれる。以下はその歌詞である。

酒田高野の 米ならよかろう 沖の弁財衆に
たた積みしよ
寺町の前なる 高燈籠見やれ 上げつ下げつ
の ひまもない
田舎なれども 金谷の薬師 花の高田が 目
の下だ⁽¹⁵⁾

「米大舟」は「弁財衆」に由来し、江戸時代この地に寄港した北前船に乗っていた船乗りを「ベンザイ衆」と呼ぶ。それらが訛って「べんだいしゅう」から「べいだいしゅう」になった⁽¹⁶⁾。また、昭和50(1975)年に大潟町無形文化財に指定された。

もともと大潟区は、海から切り離された潟湖が多く存在していた。そのため、江戸時代に大規模な干拓が行われた。それは潟川・新堀川を掘ることで、潟湖の水を日本海に排水するものであった。先に開削が進んだのは潟川で、1661年に開削が始まった。1666年には寛文大地震により潟川が崩壊し、その後も河村瑞軒の活躍により、勾配が緩やかな潟川を保倉川につなげる工事が続けられ、1678年に潟川が完成した⁽¹⁷⁾。しかし、梅雨時期や享保年間の干ばつと長雨のため、もとの大潟に戻ってしまい、人びとは大変苦しんだ。そこへ酒田の亀田伊兵衛が北前船で直江津に着き、大潟区の人びとの現状を聞く。その様子が『大潟町史』に描かれている。

……8代将軍吉宗公の享保年代の初期は、来る日も来る日も旱魃と長雨のため、上越地方は凶作となりました。そのため、農民の生活はどん底に落ち、一家離散などの悲劇が至る所に続出しました。特に潟町地方の悲惨な姿は、目も当てられないほどでした。そこで、潟町の御蔵組中17か村が、川浦代官所に、「この苦しみを是非救ってください。」とお願ひしましたが、全然顧みられませんでした。

当時は潟町をはじめ犀浜中は、川浦代官所の支配を受ける幕府直轄の領地でしたから、高田の殿様とは無関係でした。したがって、天領の民衆を高田の殿様が救うはずはありません。それどころか、当時高田の殿様であった松平越中守定輝は、いろいろな土地問題で、そんな余裕はありませんでした。

そうこうしているうちに潟町の田んぼは、昔の大潟そのままの湖となってしまう、稲穂の顔も見ることさえできない状態になってしまいました。

そこで、潟町村外26か村が連名で、川浦代官所の小宮山長左衛門並びに柴山藤兵衛の両代官(この2人は1年足らずで転職となりました)を再び訪れて、農民を救ってくださるようお願いしましたが、結局了解を得ることができませんでした。そのため、農民衆の苦しみは、年とともにますます深刻になるばか

りでした。

その時、潟町の庄屋八木十右衛門さん（現在の八木自転車店の先祖）は意を決して、数度にわたって代官所へ救助をお願いしましたが、「遺憾だ」「駄目だ」の1点張りで、もうずがる綱もなくなってしまいました。

ところが不思議にも「捨てる神あれば、助ける神もある」ということわざがあるように、この時、潟町のこの苦しみを救うために手を差し伸べた義人があったのです。その人は弁財船の頭目亀田伊兵衛その人でした。

伊兵衛は奥州山形の人で、米俵を満載した船を今町（今の直江津）から、大阪に向かって出港という間際でした。ちょうどその時通りかかった潟町の庄屋八木さんを乗せた伝馬船の船頭衆と、この伊兵衛の船がぱったりと出会いました。

伝馬船の船頭衆が、

「やー親方、今お立ちですか。」

と挨拶をし、続いて庄屋の八木さんを紹介しました。そこで八木さんは、凶作で、犀浜中特に潟町が一番困っていることを語る述べました。すると伊兵衛は非常に同情しました。伊兵衛はその時、何か心に決するところがあったのでしょうか、

「今は廻送の任務中なので、いずれ国へ帰ってから考慮しましょう。」

と言いつつ残して出港していきました。

さて、その後数日を経てある日、潟町の浜浦に米俵を満載した弁財船がにぎやかに横付けになりました。さあ大変です。庄屋の八木さんをはじめ、村の重立はもちろんのこと、伝馬船の船頭衆も狂喜して迎えたのでした。

弁財船の頭目伊兵衛は、先般の約束を実行し、潟町の人々の苦しみを少しでも救ってやろうと、郷土酒田の人たちの義侠心に訴え、義米を募り、船に積み込んで運んで来てくれたのでした。

米俵の有難みはいうまでもなく、この義侠心に感激した潟町衆の気持ちは、全くたとえようはなく、涙を流して喜び合いました。

そこで早速村役人衆が集まって相談をし、感謝とお礼の気持ちを込めて酒宴を開きました。

その酒宴の席のことでした。主賓の伊兵衛はころ合いを見計らい、つと立って床の間に置いてあった「ビンダライ」を左手に持ち、右手を上下に振り回しながら「酒田高野の浜米ならよかろう」と、音吐朗々と歌いながら踊り始めました。

その動作は、いかにも優美であり、典雅であり、調和が実によくとれているので、満座の人たちはただ恍惚と眺めるだけでした。やがてそのうち、もう我慢ができず、全員総立ちとなって、ともに伊兵衛に和して踊りました。潟町において弁財船の米大舟踊が初めて踊られたのは実にこの時です。要するに、これが米大舟の走りだったのです。

その後1度、伊兵衛は帰国しました。けれどもよほど潟町の人情が気に入ったのでしょうか、潟町に永住することを申し込み、ついに妻子を連れて来て、小山孫右衛門さん宅の裏手に1戸を構えました。そして春秋の神明宮のお祭りには必ず陣頭に立って、青年衆にこの踊を指導しました。⁽¹⁸⁾

以上から、米大舟を伝授した亀田伊兵衛は、凶作で苦しむ大潟区の人びとにとって命の恩人であり、その後も大潟区に戻って生涯を終えた。つまり、「海から来る者＝プラスの存在」という考えが生まれたといえる。また米大舟は、「田舎なれども 金谷の薬師 花の高田が 目の下だ」と歌われる。金谷の薬師とは、寛永年間（1624～1644）に高田藩主松平光長の母勝子が厚く信仰した如来像のことで、金谷山には医王寺薬師堂が建てられた⁽¹⁹⁾。古くからこの地で厚く信仰され、伝説で語られる「金谷薬屋」もここに由来があると考えられる。また、「花の高田が 目の下だ」というフレーズからは、苦しむ大潟区の人びとを救おうとしなかった高田城主や幕府をあざけるように歌われる。ここから、大潟区の人びとがどれほど亀田伊兵衛に命を救われたのかを察することができる。

3.5 上小船津浜と国府

次に注目したい点は、「上小船津浜」という場所である。上小船津浜の地名の由来について、石

田耕吾は、「小船津（大湯町）…上古の舟戸部の定住した地名ではないだろうか、舟戸部は国府近くに置かれるのが通例だという⁽²⁰⁾」と考察した。ここで、国府で何らかの出来事があり、この地に移ってきた人々が住んでいたと推測できる。では、この地の国府はどこであったか。もっともよく知られている国府とは、伝説にも登場する直江津である。今でも「国府」という地名が残っており、聖武天皇が国府毎に建立した「国分寺」も残っている。しかし、この直江津からは、当時の遺跡が何一つ出土していない⁽²¹⁾。海に沈んでしまったという説もあるが、この直江津の「国府」は、上杉謙信が春日山城築城の際に移したものであると考えられている⁽²²⁾。そして現在有力な古代の国府の場所は、新潟県妙高市の今池遺跡である。井上鋭夫は「古府（今府）より国衙（国賀または国川）へ、そしてその国衙より府中（直江津）へと、関川をしないでくだって日本海に達したことが考えられよう⁽²³⁾」とした。つまり、中央権力が南方から北上して来たことが分かる。これは『古事記』でも確認ができる。それは、「大国主命の国譲り」譚である。天照大御神が葦原の中つ国を手に入れる際、建御雷神を使者として送り、大国主命に交渉をしている場面である。大国主命は諸国を治めている自らの息子である神にその旨を伝え、交渉するように建御雷神に言う。その1つが建御名方神との交渉である。引用すると、

「いま一人の子の、タケミナカタノ神がおりまする、これのほかにはおりませぬ」

こう語られる折から、そのタケミナカタノ神が、千人引きの大石を手先で差し上げながら来て、

「何者じゃ、わが国に来て、ひそひそぬかしているやつは。この国がほしいというのか。それでは、力くらべをすることにしよう。わしが、まずそなたの手をつかんでみるが、よいか」

タケミカツチノ神は、言われるままに手を握らせなざると、御手が突き立つ氷のようになり、また握れば剣の刃のようになって握ることができない。タケミナカタノ神は震えて後退りされるのを、

「今度は、こちらの番だ、さあ手を出せ」

と、握るなり、若輩をつかむように造作もなくつかみひしいで投げ放されると、タケミナカタノ神は、そのまま逃げ去られた。

「おのれ、逃げるか」

と、信濃の国の諏訪の湖畔まで追うて、追い詰め、殺そうとなさる時、

「恐れ入りました」

と、タケミナカタノ神は平伏して、

「わたくしをお許しください。ここからほかの所には出て行きませぬ。父のオホクニヌシの命令にもそむきませぬ。また兄のヤヘコトシロヌシノ神の言葉にも、反対いたしませぬ。この葦原の中つ国は、天照大御神の御子様の仰せ通り献上いたしまする」

とあやまられた。そこで、また帰って来て、オホクニヌシの神に向い、

「そなたの子の、コトシロヌシノ神、タケミナカタノ神は、天つ神の仰せのままにそむきませぬと承服いたしましたぞ。さ、そなたの心はどうじゃ」

「わたくしの子どもの二神がさよう申しましたならば、その通りに、わたくしも仰せにそむきませぬ。この葦原の中つ国は、仰せのままに差し上げましょう。……⁽²⁴⁾」

大国主命の子である建御名方神が、天つ神である建御雷神に追われ、信濃の諏訪湖に鎮座するという話である。ここから、天つ神が現在の長野県まで進出したことがわかる。さらに『国史大辞典』には「頸城とは諏訪盆地を経て北進した中央勢力が、関山を越えた丘陵の頸部に設置した「キ（柵・城）」ないし関を指すもので、和銅元年（708）出羽国設置ののち、これが政庁となったと思われる⁽²⁵⁾」と記述され、中央勢力が長野から北上したことがわかる。そして、新井に国府を建て、この地方の中心として政務を行い、時代とともにこれが北上したことが言えよう。

しかしなぜ今池から北上する必要があったのだろうか。それは、この今池遺跡近くを流れる「関川」にあると考えられる。関川は古くは「王^わうけ川」、別名「荒川」と呼ばれており、その名の通り、「あばれ川」なのである。明治時代（1911年）の

地図⁽²⁶⁾(図4)で見ると、今池遺跡は、ちょうど川が曲折し、氾濫が起るところに位置する。

さらに別所川・櫛池川にも囲まれ、洪水が免れない位置にある。逆に、直江津の河口付近では、川幅が広く、直進して日本海に注いでいるので、氾濫は少ない。すなわち、古代の人々は氾濫から政庁を守るために、国府を北上させたと考えられる。

3.6 直江津と越後福島城

直江津に国府を置いた後、舟戸部たちは小船津浜へ移住する。なぜさらに北上する必要があったのだろうか。これは、直江津という地に由来する。直江津は『和名抄』に、「水門」「都宇」などの地名が残っていますが、水門、都宇ともに今の直江津であろうと推測されています⁽²⁷⁾とあることから、古くから港としての役割を担い、交通の要所であったといえる。佐々木高弘は根の国・底の国から平安京にやってくる疫病の神や鬼たちを、交通の要所要所で祀る道饗祭でもてなすことで、それらから平安京を守っていたと考える。また、そこには牛頭天王やその化身であるスサノオ

を祀る牛頭天王社があるという⁽²⁸⁾。直江津にこのような怨霊や妖怪を食い止める場所はあったのだろうか。直江津にも牛頭天王を祀る八坂神社がある(図5)。

安政5(1858)年にコレラが全国的に大流行した際、「八坂神社(祇園社)で疫病退散の祭礼を執行したが効果がないので、神官を大勢呼んで町じゅうを祓いして回ったがやはり終息せず、境内に屋形を造営して御天王様(牛頭天王)の神輿を安置し、三日三夜神楽を舞って平癒祈願をしたところ、悪疫はようやく退散し『御神徳をもって疫鬼退散せり』と、丁頭が藩庁へ届け出た⁽²⁹⁾」とあるように、この地域で伝染病が流行したとき、八坂神社が疫病退散の儀式を行なった。現在でも関川河口付近に八坂神社がある。つまり、港から入ってくる疫病を直江津で食い止める機能があるといえる。

さて、この直江津の土地の区画に注目していくと、碁盤の目のように区切られていることがわかる。これは城下町によくある区画であるが、直江津に城があった形跡はあるのだろうか。直江津は



図4 古代の国府と関川
島方洗一編・企画

『地図でみる東日本の古代 津令制下の陸海交通・条里・史跡』
平凡社、2012年、272頁に筆者加筆

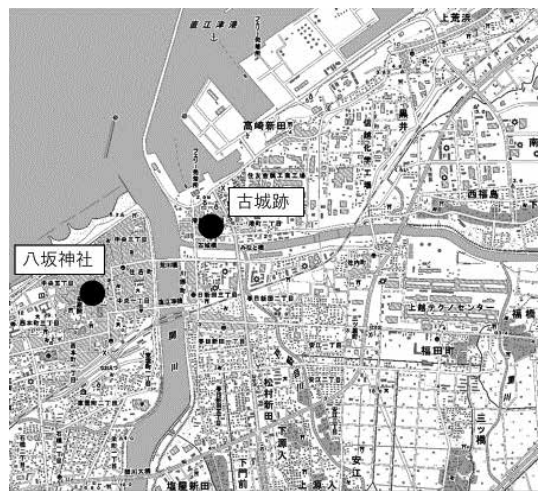


図5 八坂神社と古城跡
2万5千分の1地形図「高田」より

戦国時代末期から江戸時代初期の7年だけ城下町であったことがある。越後福島城が1598（慶長3）年、上杉謙信の山城である春日山城に代わるものとして、関川河口付近の右岸に築城した。1606年に完成し、豊臣秀吉の命で堀秀治が越後に封ぜられた⁽³⁰⁾。ここで注目したいのが、この堀氏の家系である。『姓氏家系大辞典』では、「美濃の堀氏 久太郎秀政を出して有名になるも、出自については種々の説あり。一に菅原姓を稱す。これにつき新撰志は『堀、前田などの家が、梅鉢の紋を付くるも、斉藤が一家親族をりし故とぞ。然るをこれらの氏人とするは、後世の讒也』と。」「菅原姓 前項秀政の次男美作守菅原親良（吉千代、彌太郎、秀家）は菅原姓を稱す。初め越後の国蔵王の城を領して、四萬石、此の内一萬石は家人近藤織部重勝・領せしと云ふ。慶長7年、兄秀治の次男鶴千代を〇うて所領を譲り、都に上り住みしが、鶴千代・程なく卒して所領を没収さる⁽³¹⁾」とあることから、堀氏が菅原姓を名乗っていたことがわかる。菅原氏といえば、菅原道真を思い出す。菅原道真は昌泰の変で太宰府へ左遷され、その後怨霊となって平安京に現れ、紫宸殿に雷を落としたという伝説がある。また、福島城跡からは、

「梅鉢」の瓦が出土しており、中沢肇は菅原道真を祀る天神信仰と深い関係があるとしている⁽³²⁾。つまり、この城に来た堀氏も怨霊を祀るものであるということが出来る。また、福島城の表門への出入りは、「荒川橋の少し上流の住吉神社付近から架けられた応化橋を渡り、枳形門を通過して三の丸から、二の丸、本丸へと進む⁽³³⁾」とある。現在でも「住吉町」という地名は残り、図6に見るように、福島城に入城する際は、この住吉神社付近に架けられる応化橋（往下橋）を通過して進む。

住吉社というのは、「瀬戸内海の海上生活者の信仰の中心」であり、渡辺党が「住吉者の支配機構に関与」していた⁽³⁴⁾。渡辺党というのは、酒呑童子退治で有名な渡辺綱を祖先とする氏族である。つまり、鬼神（疫神）退治との関連を挙げることができる。したがって、この直江津の地は八坂神社ならびに越後福島城、住吉神社によって二重に疫神を防ぐ要所であったことがわかる。

さらに着目したいのが、福島城築城に際して、住民が移住させられたということである。資料によると「現在の上越市頸城区西福島には、福島築城以前、城の縄張りの中になった場所に福嶋村があったのが、築城に伴って、現在の大潟区九戸浜



図6 福島古城 渡邊昭二『甦る「越後福島城」』
北越出版、2006年、裏表紙「福嶋城址現況図」に加筆

のあたりに移転させられたとの伝承⁽³⁵⁾とある。これは推測に過ぎないが、八坂神社や住吉神社などの鬼神（疫神）退治の役割を果たしていた人びとも現在の大潟区に移住したのではないか。そうであるのならば、のどけの薬で登場する「上新保」という人物はその子孫なのではないだろうか。「上新保」という人物が鬼神（疫神）退治の能力を秘めていたから、河童と出会い、上手く対応することができたと考えられる。

以上から、諏訪から入ってきた中央勢力が関川を下り、直江津に国府を開いたことがわかり、かつ福島城の築城の際に人々が大潟区の手沿いに移住させられたということがわかる。もともと大潟区の手沿い地域に住む人々は、怨霊を食い止める地域から来た人々をどう認識していたのだろうか。それはこの伝説内で、河童が上小船津浜に出没したことからいえる。つまり、怨霊からこの地を守る直江津をプラスに捉え、さらにもともと直江津に住み、上小船津浜へ移住してきた人々をもプラスに捉えることで、先述した河童を出没させたと考えられる。

4. 鵜ノ池の伝説

4.1 鵜ノ池の伝説の概要と問題提起

次に鵜ノ池の伝説について考察していく。『新潟県伝説集成〔上越篇〕』に載っている伝説は次の通りである。

昔、鵜の池に河童が住んでいるといわれ、子供たちが水泳しても深いところへは行かなかった。この池に馬洗い場があり、農家の人たちは夕方になると馬を連れて来て、馬に水を飲ませてやったり体を洗ってやったりしていた。

ある日、山鵜島の若者が一生懸命に馬を洗っていると、馬が急に騒ぎ出した。水から引き上げてみると、尻尾に河童がつかまり尻子玉を抜こうとしていた。若者は驚いたが、すぐ取り押さえ、河童の生命源である頭の上の皿をたたき割ろうとしたところ、河童は、「二度とこの池に来ませんから、どうぞかんばんして下さい」

と泣きながら頼むので、かわいそうになり許してやった。

その後、河童は梶村の大地主大滝家の大けやきの空洞に住みつき、二度と鵜の池へ現れなかったという。この大けやきは、昭和35年ごろまであったが、伐採されて今はない。⁽³⁶⁾

図7が現在の鵜ノ池である。



図7 鵜ノ池（曾根撮影）

「のどけの薬」同様、『大潟町史』にも鵜ノ池に出没する河童の伝説が載っているが、『新潟県伝説集成〔上越篇〕』と伝説自体に目立った異話は見当たらなかった。しかし、語り部は明記されており、山鵜島新田の人である。また、これは全国に存在する「河童の馬曳き」譚に分類される話であるが、鵜ノ池の伝説にのみ語られる点を抜き出すと以下になる。

- ①河童が鵜ノ池に出没する
- ②山鵜島の青年が被害者となっている
- ③河童は梶村の大地主大滝家に逃げていく

本稿ではこれを、鵜ノ池の伝説で語られる地域性とみて考察していく。特に③河童は梶村の大地主大滝家に逃げていくという点に注目したい。なぜならば、①や②と比較すると特定の場所と家が記述されており、ここに伝説が私たちに送る重要なメッセージがあると考えられるからである。したがって、ここでなぜ河童は大滝家に逃げていくのかという問いが生まれる。そこで、まずは梶村と河童の関係性、そして大滝家と河童の関係性を明らかにしていく。

4.2 梶村と河童

梶村とは、鵜ノ池から東に2kmほど進んだ吉川区梶のことを指している。「慶長二年越後国絵図⁽³⁷⁾」には、「鍛冶村」と記載がある(図8)。

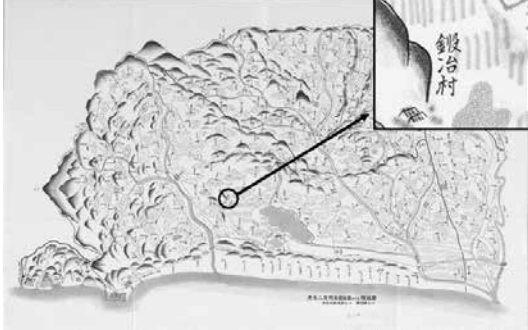


図8 「慶長二年越後国絵図(1)」

新潟市の図書館、新潟県立デジタルアーカイブに筆者加筆

加えて、「金山(吉川町)付近から金屎^{かねくそ}が出、舟着き地藏⁽³⁸⁾があって川下に梶があり製鉄をした跡地である⁽³⁸⁾」、「吉川区梶(鍛冶)の地に金糞山が残っています⁽³⁹⁾」とあることから、

古くはこの地で製鉄を行っていたことが分かる。ここで着目したいことは、「河童が金気を嫌う」という点である。新潟県内の伝説を見てみる

と、「河童の詫び状」譚で多く語られている(表2)。

中村禎里は河童が嫌うものの中で鉄製品を取りあげ、神話で水神を鉄製の利器で殺戮したり、大祓や水神祭で鉄製の鍬を用いたりすることから、河童が鉄を嫌うことを論じている⁽⁴⁰⁾。つまりこの典型から考察すると、河童は梶を嫌わねばならず、その地域を避けねばならない。しかし、鵜ノ池の伝説では、河童は金気を嫌うどころか、むしろかつて製鉄をしていた土地へ向かっていることがわかる。つまり、鵜ノ池の伝説で語られる河童は鉄を恐れないといえる。なぜ、鵜ノ池の伝説で語られる河童は金気を恐れないのだろうか。沢史生は「河童=古代産鉄民」の視点に立ち、「河童はキュウリを好む」という観点から、民俗学の「常識」を根底から疑い、河童が金気を嫌うという性癖は「その道のある権威者が伝承の真意を究めることなく『河童はカネ気を嫌う』と書き残せば、余人はそれを鵜呑みにして、もはや疑おう余地など寸分もない気持ちで、右に倣えしてきたからである⁽⁴¹⁾」と考えている。

つまり、河童が金気を嫌うという「常識」は覆すことができる。本稿では、沢の視点に立ち、「河童は本来金気を恐れないもの」と見て、考察を進める。

表2 新潟県内の「河童の詫び状」譚

場所	河童の行動	人間の行動	その後	文献
西頸城郡青海町	腕を伸ばして馬の尻ご玉を抜こうとする	河童の腕を抜く	垣根の木の枝に魚が掛けられる→鉄のかぎに取り替えたら届けられなくなった ・カッパは金物を嫌う	『にいがたの怪談』
加茂村(現佐渡市)	・馬についていく	てんびん棒で打ち据える	・わび証文と魚を毎日届ける事を約束 ・木かぎを鉄に替えたら魚は届けられなくなった	『にいがたの怪談』
中蒲原郡大蒲原村栃林(現村松村)	・馬の尻ご玉を抜こうとする	捕まえて殺そうとする	・毎年大みそかにサケを一本川端の木に掛けておくことを約束 ・木のかぎを鉄のかぎに替えたらサケは届けられなくなった	『にいがたの怪談』
糸魚川市土塩	・子どもに化けて尻をつつく	腕を抜く	・腕を返してもらおう代わりに入り口の木のかぎに毎日魚が届けられたが、鉄のかぎに替えたら来なくなった	『にいがたの怪談』

図9は河童が逃げていった梶村周辺の地図に、筆者が加筆したものである。

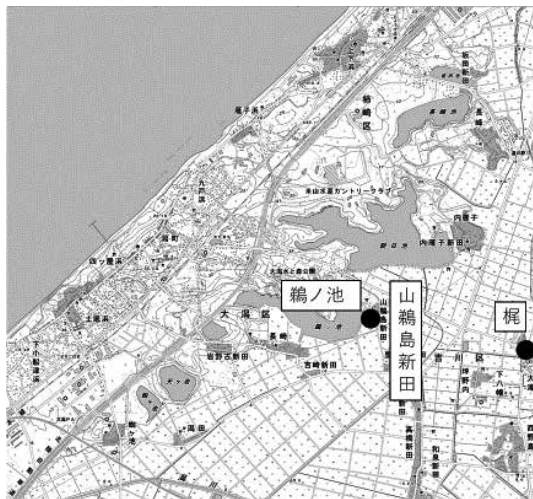


図9 鵜ノ池と梶 2万5千分の1地形図「高田」より

ここからは、製鉄をしていた形跡はなく、田園地帯が広がっている。ここから、時代が移り変わって、この地が開墾され、稲作を主とするようになったといえる。なぜこの地が開墾されねばならなかったのだろうか。それは税の米納に加え、人口増加による食糧不足と考えられる。鬼頭宏は、時代ごとの人口の増減を表やグラフにまとめ、それらを考察した。特に江戸時代には、全国の人口が急増し、それに比例して石高や耕地面積も増加した。加えて、「手工業生産や商品流通の高まりによって都市人口比率が高まり、農村人口比率が下がったであろうこと、人口増加によって年少人口が増えていることを考慮するならば、活発な新田開発によって耕地面積を拡大しながら、17世紀には労働生産性は低下したが、土地生産性を大きく引き上げることでよりいっそうの人口増加に対応した、と説明することができる」と言う⁽⁴²⁾。つまり、耕地面積を増やすとともに、農業技術の革新をもって人口を支えていったことがわかる。ゆえにこの地も製鉄地帯から田園地帯へと開墾されていったと考えられる。また、旭地区は大きな河川がないため、田畑耕作には不向きである。そのため溜池灌漑を主としてきた⁽⁴³⁾。これが耕地面積の拡張、農業技術の革新に相当する。では、この地を開墾したのは誰であったかを次節で考察していく。

4.3 大滝家と河童

結論から述べると、この梶村を含む旭村を開墾したのは、伝説で語られた大滝家なのである。大滝家は元祖田中三郎左衛門が天正16(1588)年に梶村に居を構えてから、代々開墾に力を入れてきた⁽⁴⁴⁾。中村禎里は千葉徳爾の「河童の悪行をテーマにする攻撃一敗北(帰順の項は欠如)型の伝承は、人工灌漑水利の発達した地域に濃厚に分布」という考えについて「正鵠を射ている」とした⁽⁴⁵⁾。また、今回大滝家の子孫の方に聞き取り調査を行なったところ、「一番大滝さんが難儀したのが溜池をつくることです。水争いが絶えなかったのです。そこで少しずつ開拓して、高田城主の榊原氏に呼ばれて、その功績を称えて帯刀を許されたんです。」と話をしていた。つまり、大滝家は灌漑設備によって莫大な富を得たことが分かる。小松和彦は、「多くの社会では、家の盛衰を神秘と考え、その神秘を説明するとき、神秘的力や神霊の作用に原因を求めするのである。したがって、ある家が長者になったのは、神秘的作用(神や妖怪の介入・援助)によると考える。屋敷神や屋内神として一括しうるさまざまな神霊、座敷ワラシや河童、山姥などの妖怪類、そして「憑きもの」と総称される動物霊などが、ことさら家の盛衰の原因とされる⁽⁴⁶⁾」の述べ、ある家が盛衰することは、河童を含む「憑きもの」が原因だと説明し、そこから異人殺しなどの民話が生まれるとしている。加えて千葉徳爾は、「水の神からおくられた小童の存在を以て、自らの家の富と古さとを誇る者が多かったのである⁽⁴⁷⁾」と述べ、ここから、開墾によって富を得た大滝家は、河童を富の象徴として受け入れたということがいえる。

さらに、大滝家での聞き取り調査のなかで「八祖宮というお宮さんが梶にはあって、直江津の八坂神社を分祀してるんです。この近辺では梶だけです。」という話もあった。直江津の八坂神社とは、前章でも触れた通り、越後の国府を疫神から守り、それらを祀る場所である。その分祀社が旭地区で梶のみにあることは、八祖宮で疫神や妖怪を祀ることで、それらを鎮め、味方に付けているということになる。この妖怪を味方に付けるという事例は他にあるのだろうか。佐々木高弘は、徳島県美馬郡脇町の「首切れ馬」伝説における徘徊ルート

の研究において、吉野川北岸における対立関係で、妖怪を味方につけ、わが村へと呼んでいる事例を明らかにした。徳島県美馬郡脇町は藍の産地であり、藍商と藍作農家の経済的な格差から首切れ馬を走らせた。しかもその妖怪は「正義を行うプラスの価値を帯びて」おり、首切れ馬は自らの集落を通して行くという異話の採取に成功した。そして「首切れ馬」伝説にみる「怪異の見える風景」とは、フラストレーションによって局地化した頭のなかの地図の投影であり、「伝説というものが、しばしばこのような民俗社会の不安・恐れというものを投影しているのであれば、いずれの伝説も、伝承集団の局地マップを内包した近隣集団への攻撃行動とも考えられる⁽⁴⁸⁾」と述べた。

それを踏まえると、鵜ノ池の伝説にも何らかのフラストレーションが投影されており、局地マップを内包した近隣集団への攻撃行動が含まれていると考えられる。つまり、この伝説が生まれた時を考える必要がある。

4.4 鵜ノ池の奪還と失敗

鵜ノ池の伝説で語られる地域性を3つ前述したが、そのうち、①河童が鵜ノ池に出没するという点に着目したい。前節でも述べたが、大滝家は開墾によって河童を富みの象徴として受け入れた。つまり、河童と関係を持った大滝家が、鵜ノ池に河童を出没させていると捉えることができる。なぜ鵜ノ池に河童を出没させる必要があったのだろうか。

第一にこの鵜ノ池の伝説は、大湊区の伝説として語られており、すなわち旭村（現在の吉川区）の伝説ではないことに留意しなくてはならない。つまり、大湊区と旭村（現在の吉川区）との間で、前節で述べたフラストレーションがたまるような、対立関係があったのかという点を考察していきたい。

そこで伝説に戻って考察を進めたい。伝説内で具体的に年代が述べられている箇所は、大滝家の大けやきが切り倒された時、すなわち昭和35年であり、そのあたりで検討をつけて考える。すると、昭和30年にこの地域は町村合併を行なったことが分かった。それは、県道30号線（新井柿崎線）を境にして、旭村が分村するという旭村にとって大きな選択を強いられたものであった。

具体的には、「旭村は、当初地形及び経済環境からみて吉川・源の両村と合併することが最も適当であると思われていたようであるが、周辺町村に近接している地区においては必ずしもそうではなく、その地理的關係などから他の町村への合併を希望する動きも強く、これが合併する場合は全村一丸という村の基本的な考え方と対立し、のちにはかなり村内を紛糾させることになった⁽⁴⁹⁾」とあるように、旭村は隣接の吉川村・源村との合併を進めていたが、旭村の一部（新井柿崎線以西）の地区（大字内雁子・大字内雁子新田・大字山鶴島新田・大字里鶴島新田・大字鶴田中新田・大字米倉新田・大字高橋新田・大字和泉新田）は、その地理的・経済的理由から、三村合併を拒否し、湊町村（現在の大湊区）に編入されることになった。鵜ノ池の伝説の地域性で示した3項目の②山鶴島の青年が被害者となっているという項で、この山鶴島とは前述した大字山鶴島新田を指しており、旭村から分村した村の1つである。図10はその境界線と各区域を表したものである。

ここで、なぜ新井柿崎線を境に旭村は分村してしまったのだろうか。それは、人びとがなぜ新井柿崎線で分村したのかという、空間行動に影響を与える何らかのイメージ世界が広がっていると考えられるからである。まず、新井柿崎線は古代の交通路として、越後国を南北に繋いでいた⁽⁵⁰⁾。佐々木高弘は、怪異伝承が古代の交通路上に沿って語られることを明らかにした。特に古代山陰道



図10 大湊区と吉川区の範囲
2万5千分の1地形図「高田」に筆者加筆

における怪異の考察では、山陰道が平安京から太宰府へ向かう交通路であったこと、因幡国府が衢の役割を果たしていたことに着目し、地図上でそれらを示した⁽⁵¹⁾。衢とは、道がいくつも交差する箇所であり、根の国・底の国から道路を伝って都にやってくる疫神や妖怪を、道饗祭によって追い払う場所である。つまり、人びとはここで怪異を見たり、追い払ったりするのであるならば、その場所に対する恐怖や不安などのマイナスの感情を抱いていると考えられないだろうか。さらに佐々木は、昔話で語られる心のなかの景観研究において、人間が開拓した地である意識の領域と未開拓の無意識の領域を図式化して示し、後者に鬼などが棲み、その中間で怪異が起こるという構図を見出した⁽⁵²⁾。つまり、ある境界線をもって人びとはそこから先にある未開拓の領域に恐怖や不安を抱き、怪異を作り出すのである。これを、鵜ノ池の伝説にもあてはめて考えてみると、新井柿崎線がその境界線となり、それ以西が伝説を作り出した人びとにとって意識の領域であり、逆に新井柿崎線以東である梶村側が無意識の領域であるという図11が完成する。

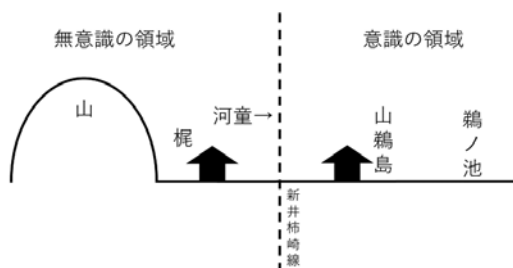


図11 鵜ノ池伝説における心のなかの景観

では、実際に人びとはそのように環境を知覚しているのだろうか。今回、本稿を書くにあたり、大滝さんに聞き取り調査を行い、その中でメンタルマップを描いていただいた。メンタルマップとは、「個々人が頭のなかにもつ地図イメージ」のことで、「主観的で相対的な地図」であり、「主観的であるが故に、その地域に住む人々の日常の行動や価値観、好き嫌いなどを、知らずうちに表象する」と佐々木は言う⁽⁵³⁾。大滝さんに描いていただいたのが図12である。

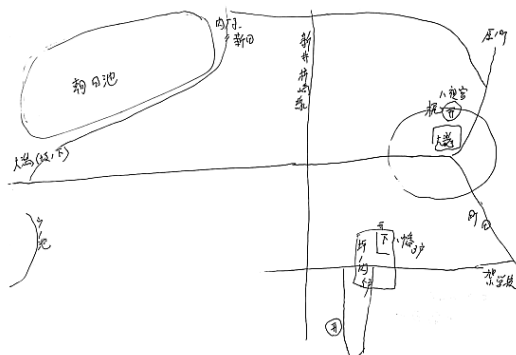


図12 大滝さんのメンタルマップ

大滝さんは梶村に住んでいるから、怪異側のメンタルマップを採取したことになる。大滝さんは中央に新井柿崎線を引き、その後それに交差する道を描いた。それから梶の集落、その他坪野内や下八幡などの集落も付け足した。描きつつ、「ここには昔大滝さんが建てた小学校があって」、「この先は原ノ町に通じていて」と説明を加えた。一方で、新井柿崎線以西は、「朝日池」や「ウノ池」、その他「内雁子新田」を除きほとんど何も描かれていない。伝説で登場した「山鶴島」も描かれなかった。これは、怪異側からみたメンタルマップであるため、大滝さん自身が新井柿崎線以東を異界視していないということにはならないだろうか。

また、大滝さんの聞き取りから、「大滝さんは広大な土地を持っていて、潟町駅まで大滝さんの土地だった。なので『梶から潟町の駅まで他人の土地を踏まずに行けた』とよく言ったものだ。」という話があった。つまり、この町村合併によって大滝家の土地の大半が大潟区に編入したことが分かる。さらには、旭地区は4.2でも述べたように大きな河川がなく、溜池灌漑を主としてきた。ゆえに、鵜ノ池や朝日池などは旭地区にとって重要な水源であった。これらが、大潟区に編入されることは、旭地区にとって死活問題であったと考えられる。さらには大滝家の財産である土地も大潟区に吸い取られる形になった。これを含め、昭和35年7月、吉川町に合併された旧旭村の一部（大字西野島・大字梶・大字坪野内新田・大字下八幡新田・大字町田・大字長沢新田・大字神田町新田・大字六万部・大字田尻）から、大潟町への境界線変更運動が行われた。これは、大潟区との境界

線を変更し、吉川区に合併された旧旭村の一部が大潟区への編入を希望するもので、昭和30年に行なわれた町村合併について以下のように述べられている。

- 1 合併当時(昭和30年1月23日村議会議決)地域の实情から冬期は青壮年のほとんどが出稼不在となるが、重要な問題であり出稼者の帰郷をまって部落の意志決定をすべきであるから、四月まで結論を出さないよう要望したが容れられず村首脳部の強引な手段に寄り部落民に十分な検討の機会が与えられないまま決定された。
- 2 部落民としては当時地理的にも、経済的にもまた通信、交通の面からも潟町村への合併若しくは、潟町村・旭村・明治村・大瀧村・の四カ村案の実現を希望する者が多かったが、村の中堅層の大部分が不在中に決定されたため議会を動かす力とらなかった。⁽⁵⁴⁾

その後、8月20日に関係部落民470人余りが旭中学校に集い、「境界変更期成同盟会、連絡協議会結成総決起大会」を開き、関係機関に陳情・請願の運動が続けられたが、その年の11月28日の議会で住民の意思を無視して否決し、更に翌日再度請願書を提出したが調査することもなしに12月25日の議会において再度否決された。つまり、この地域は豪雪地であるという地域の实情から、村を動かす力となる若者はみな出稼ぎに出かける。その間に進んでしまった町村合併について再検討すべきであるという村民の意見を、行政は無視し、その状態が現在まで続いているのである。吉川区と合併した旧旭村の一部、特に大瀧家にとっては意に沿わぬ結果となり、大きなフラストレーションとなったと考えられる。なぜならば、大瀧家の土地を奪還することができなかったことに加え、鶺ノ池の奪還にも失敗したからである。

ここで、伝説を作り出した側に立って考えてみる。『大潟町史』には山鶺鳥新田の人が語り部となっていることが書かれている⁽⁵⁵⁾。伝説内では河童に襲われた被害者側であり、町村合併で大潟区に編入した新井柿崎線以西の集落である。つま

り、大潟区は鶺ノ池を奪還するために、大瀧家が河童を鶺ノ池に出没させたと考えたのではないだろうか。しかし、河童は奪還に失敗して大瀧家に逃げ帰る。これは、町村合併での境界線変更運動の失敗となぞらえて考えることができ、これを象徴していると言える。

5. おわりに

本稿では大潟区で語られる2つの河童伝説について考察した。上小船津浜の伝説では、海からやって来た河童がなぜ上小船津浜を選んだのかについて国府との関係性に着目して考察したが、海側に住む人びとの認識がここから読み取れる。つまり、海から来る者をプラスに捉え、国府に住まう鬼神(疫神)を祀る者たちを、いわば「英雄」視していた。ゆえに、伝説を語るもともとそこに住んでいた土底浜の人びとは、プラスの意味を込めて河童を上小船津浜に出現させたのである。一方で、鶺ノ池の伝説では、河童と密接に関わりをもった梶村と大瀧家を取りあげ、大潟区との間で町村合併によって溝が生まれたことを契機に、河童伝説が構成されていったと述べた。伝説で河童の被害にあった山鶺鳥は、かつて旭村の一部であり、古代の交通路である新井柿崎線より東の地域を異界視していたという仮説に基づき、以東地域と分村したい心理の現れであると結論づけた。加えて河川のない旭地区にとって、鶺ノ池が大潟区の管轄になることは死活問題であり、ゆえに鶺ノ池の奪還に河童を向かわせていると伝承者は考えたのではないか。つまり山側に住む人びとにとって河童は、自分たちから富を奪いにくるものであるといえる。ここに、海側の人びとと山側の人びとの環境知覚の差を見いだすことができる。

6. 参考文献

- (1) 中村禎里『河童の日本史』筑摩書房、2019年、54～71頁
- (2) 藤岡謙二郎編著『講座考古地理学』、学生社、1982年、11～33頁
- (3) Prince, H.C. Real, imagined and abstract worlds of the past, *Progress in Geography*3,

新潟県上越市大潟区の河童伝説についての歴史地理学的研究

- 1971, p.1 ~ 86
- (4) 鈴木郁夫・赤羽孝之編『新旧地形図で見る新潟県の百年』新潟日報事業社、2010年、188頁
- (5) 小山直嗣『新潟県伝説集成（上越篇）』、恒文社、1995年、218頁
- (6) 大潟町史編さん委員会『大潟町史』大潟町、1988年、706～707頁
- (7) 橋弘文『『説話』と民俗社会－福井県小浜市社の手杵祭から』『民俗宗教2』東京堂出版、1989年、223～250頁
- (8) 新村出編『広辞苑第七版』岩波書店、2018年、166頁
- (9) 千葉徳爾「田仕事と河童」大島健彦『河童双書フォークロアの視点1』岩崎美術社、1988年、17～44頁
- (10) 中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話2』平凡社、1977年、285頁
- (11) 飯倉義之編『ニッポンの河童の正体』新人物往来社、2010年、72頁
- (12) 沢生史『闇の日本史－河童鎮魂－』彩流社、1987年、3～4頁
- (13) 小松和彦『異人論－民俗社会の心性』筑摩書房、1995年、255頁
- (14) 花ヶ前盛明「松平忠輝と居多神社」『頸城文化』62号、上越郷土研究会、2014年、63～76頁
- (15) 大潟町史編さん委員会『大方町史』大潟町、1987年、696頁
- (16) 直江津市教育委員会内「直江津の歴史」編集委員会『直江津の歴史』直江津市教育委員会、1971年、166頁
- (17) 大潟町町史編さん委員会『ふるさと大潟町』中頸城郡大潟町、1983年、156～160頁
- (18) 大潟町史編さん委員会『大方町史』大潟町、1987年、714～716頁
- (19) 上越市ホームページ「上越市の文化財 銅造如来坐像」、2021/12/09 閲覧 <https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/cultural-property/cultural-property-jpn005.html>
- (20) 石田耕吾『頸城の地名と姓名』（私家版）、1993年、41頁
- (21) 直江津市教育委員会内「直江津の歴史」編集委員会『直江津の歴史』直江津市教育委員会、1971年、3頁
- (22) 新潟県教育委員会「今池遺跡 下新町遺跡子安遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』1巻35番、1984年、15頁
- (23) 井上鋭夫『新潟県の歴史』山川出版社、1970年、39頁
- (24) 蓮田善明『現代語訳 古事記』岩波書店、2013年、63～65頁
- (25) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第四巻』吉川弘文館、1984年、853頁
- (26) 島方洸一編『地図でみる東日本の古代律令制下の陸海交通・条里・史跡』平凡社、2012年、272頁
- (27) 中沢肇『直江津の昔と今』柿村書店、1967年、24頁
- (28) 佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014年、204～209頁
- (29) 上越なおえつ信金倶楽部『直江の津』第17巻2号、2020年、6頁
- (30) 渡邊昭二「地籍図から福島城を掘り起こす」『直江の津春号第7巻1号』直江津経済文化研究会、2007年、8頁
- (31) 太田亮『姓氏家系大辞典 第5巻』国民社、1942～1944年、5480～5481頁、国立国会図書館デジタルコレクション 2021/12/10 閲覧 <https://www.dlndi.go.jp/infondljp/pid/1123956> なお、古い文献のため読みにくい文字は○としている。
- (32) 中沢肇「福島城の瓦」『頸城文化』32号上越郷土研究会、1973年、7頁
- (33) 直江津経済文化研究会『直江の津』春号第7巻1号、2007年、7頁
- (34) 高橋昌明『定本 酒吞童子の誕生－もうひとつの日本文化』岩波書店、2020年、228～229頁
- (35) 渡邊昭二『甦る「越後福嶋城」』北越出版、2006年、4頁
- (36) 小山直嗣『新潟県伝説集成〔上越篇〕』恒文社、1995年、222頁
- (37) 新潟市立新津図書館所蔵、新潟県立デジタルアーカイブ「慶長二年越後国絵図（一）」、2022/01/07 閲覧 <https://opac.niigatacitylib.jp/>

digital/kotizu/44/keicho2nenetigokuniezul.html

- (38) 石田耕吾『頸城の地名と姓名』（私家版）、1993年、58頁
- (39) 直江津市教育委員会内「直江津の歴史」編集委員会『直江津の歴史』直江津市教育委員会、1971年、187頁
- (40) 中村禎里『河童の日本史』筑摩書房、2019年、130～133頁
- (41) 沢史生『闇の日本史—河童鎮魂—』彩流社、1987年、106頁
- (42) 鬼頭宏『[図説] 人口で見る日本史—縄文時代から近未来社会まで』PHP研究所、2007年、78～79頁
- (43) 吉川町史編さん委員会『吉川町史 第2巻』吉川町、1996年、348頁
- (44) 吉川町史編さん委員会『吉川町史』吉川町、1996年、808～812頁
- (45) 中村禎里『河童の日本史』筑摩書房、2019年、65頁
- (46) 小松和彦『異人論—民俗社会の心性』筑摩書房、1995年、37頁
- (47) 千葉徳爾「座敷童子」小松和彦編『怪異の民俗学③河童』河出書房新社、2000年、43～65頁
- (48) 佐々木高弘『怪異の風景学』古今書院、2009年、81～86頁
- (49) 新潟県総務部地方課『新潟県市町村合併誌 下巻』新潟県自治行政会、1962年、1433頁
- (50) 島方洸一編『地図でみる 東日本の古代—律令制下の陸海交通・条里・史跡』平凡社、2012年、274頁
- (51) 佐々木高弘『生命としての景観—彼はなぜここで妖怪を見たのか』せりか書房、2019年、159～165頁
- (52) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003年、5～37頁
- (53) 佐々木高弘『怪異の風景学』古今書院、2009年、68頁
- (54) 新潟県総務部地方課『新潟県市町村合併誌 下巻』新潟県自治行政会、1962年、1435頁
- (55) 大潟町史編さん委員会『大潟町史』大潟町、1988年、710～711頁